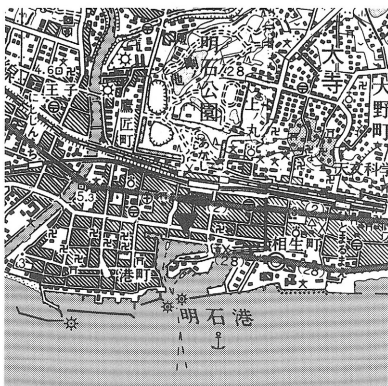


兵庫・明石城あかしじょう下町屋跡本町第一二次地点ほんまち

- 1 所在地 兵庫県明石市本町二丁目
- 2 調査期間 二〇〇五年(平17)六月～七月
- 3 発掘機関 明石市立文化博物館
- 4 調査担当者 稲原昭嘉
- 5 遺跡の種類 城下町跡(町屋)
- 6 遺跡の年代 江戸時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

明石城下町屋跡は、武家屋敷街区の南の標高約一・一mの地点に位置する。今回の調査地は、大久保忠職が城主の時期(寛永一六年



(明石・須磨)

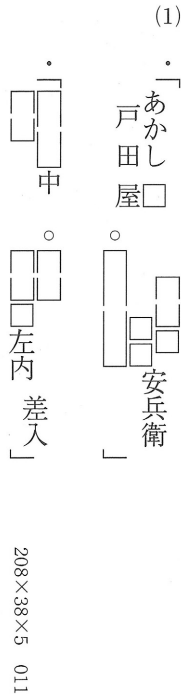
(一六三九)～慶安二年(一六四九)に成立した『播州明石城図』によると、浜まで広がる町屋の中央やや西寄りにあたる。また、『明石町旧全図』(文久三年(一八六三))では、調査地点は東西に細長い街区の中央北寄りに位置し、北側には

「西魚ノ丁」通りが東西に走り、調査地点南端で「中町」の屋敷の裏手と接している。

検出した遺構には、土坑・建物礎石・溝・井戸などがある。建物は調査区の北に続くとみられ、粘土を貼った上に礎石が認められた。調査区中央では井戸が二基見つかった。いずれも約一・六m下の礫層まで掘り込み、直径六〇cmの桶を据える。また、井戸に近接して廃棄土坑があり、唐津焼皿・伊万里焼碗など多量の遺物が出土している。

木簡は、北側の井戸の埋土から出土した。共伴遺物には肥前系磁器碗、京・信楽系陶器碗、明石播鉢、土師器皿、瓦片などがあり、井戸は一八世紀後半から一九世紀前半にかけて廃絶したとみられる。

8 木簡の积文・内容



完存しているが、墨痕の状態が悪く判読は困難である。表面からみて中央左側に穿孔がある。

(稲原昭嘉)

